

医学研究者の良きパートナーを目指して
室谷 健太 (久留米大学バイオ統計センター)

アカデミアで臨床研究の統計解析に携わって約 8 年が経ちました。私はこれまで、よく言えば医療関係者にごく近いところで研究支援をしてきました。本稿では、特に目立った経歴があるわけでもない私の、これまでの個人的な経験や感じた事を述べてみたいと思います。この短報が大学病院や研究所で一人統計家として活動している方、ARO や市中病院で統計解析担当者として所属している方に、同じような立場の者として少しでも参考になれば嬉しいです。

我々は統計支援を申し込まれてから医学研究者と対面します。私ははじめての相手と会うとき、この相談者は「私」に相談したいから来てるわけではない、と肝に銘じるようにしています。たぶん相手は自分の疑問を解決してくれるなら誰でもいいと思っています。でも、せっかくならいい気分でも帰ってもらいたいものです。望むべくは「私」のファンになってもらいたいのです。

そのためには相手が知りたいことだけを素早くピンポイントに解決してあげることが重要と思います。はじめての案件であるならスピードに特にこだわります。スピーディなレスポンスは経験上、信頼を高めます。もし同じ人が後日、違う案件で私に相談してきたらいい兆候です。これを何度か繰り返していると相手はファンになってくれるかもしれません。

一人のファンは複数の仲間を連れてきてくれます。どの案件も他と同じように肅々と的確にスピード感をもって対応を続けていきます。そうすると「私」のファンは更に増えます。そして複数のファンは集団を連れてきます。気がつけば研究するときには事前にあそこに聞きにいけ、という文化が出来て来ます。そうして研究チームや医局に組み込まれてくると、自然と支援実績も増えていきます。その頃にはいろんな研究者と対等に話ができるようになってきていると思います。

しかし悲しいことに副作用も起きて来ます。相手にすらしてもらえなかったときを思えば頼りにしてもらえるのは本当にありがたいのですが、今度はこちらの時間がなくなってきます。あんなにタイムリーにレスポンスしてたのに一週間、二週間…と反応が悪くなって督促に追われる日々が始まります。あいつは対応が悪くなった、なんて言われたりもするでしょう。私の気持ちは、はじめのときから 1 ミリも変わっていないのですが、シンプルにキャパを迎えます。信頼できる同僚がいればお願いしますが、一人部署だとそれも出来ません。

こういうときは予め初回相談時に、いつ頃にどうしようと思っている案件なのか聞いておき、もし時間に余裕があれば忙しいことを伝えて相手にも理解してもらう一手間は誤解を避けるのに有用です。ただし、本当に怖い人は待ってくれません。私も怖い目に何度か遭いました...

しかしそんな失敗があっても、一生懸命やった解析を使って一緒に作った研究が論文になり、依頼者から感謝されたときの成功体験だけは他に代え難いものがあります。アカデミアにおける統計支援は泥臭いことが殆どで、正直しんどいことも多いですが、これからも自分が頑張ることで喜んでくれる方が少しでもいる限りは続けていきたいと思っています。

最後に、元久留米大教授であった角間辰之先生とのエピソードを一つご紹介して終わりたいと思います。私が学生の頃、角間先生から「統計コンサルで、どう考えてもそのデータでは言いたいことは言えな

いとき、どう答える？」と聞かれました。私は、相手にこのままではできないと言うと思います、と答えました。すると角間先生は「統計家はできないといったら終わりだよ、まずはニコッと笑ってイエス、さあどうします？だよ」と言われました。あれから十数年経ち、その意図するところが自分なりに理解出来てきたような気がします。本当に世の中難しいことがたくさんですが、だからこそ笑顔を絶やさずにチャレンジしていきたいと思います。